海に立つ墓標

山本茂実

海に立つ墓標（ぼひょう）

山本茂実（やまもとしげみ）

角川文庫 5046

昭和五十七年二月十日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京⑧一九五二〇八
印刷所——厚徳社　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0195-143310-0946(0)

A8801/15

海中的墓标
（日6-2/A2229）

A 00230

海に立つ墓標

山本茂実

角川文庫 5046

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

野麦峠を書く前の私

――序にかえて――

私は若いころ十数年、『葦』という雑誌の編集長をしていました。

それは敗戦直後の未曾有の混乱期、価値観は転倒し廃墟の中にさまよう餓えた人々の群――しかしその餓えた人々がよく本を読みました。この時期の日本人ほどむさぼるように本を読んだものはないと、よくいわれますが、――。

『葦』の創刊号が出たのはそんな時代（昭24）でした。

「世の中がいつわりにみち、あきらめに沈んでゆけばゆくほど、真実に自分の生命を愛する人人は苦しみもだえる。そして友をよび、心にふれあう人間を血眼でさがす、『葦』はそういう人のともすささやかな『灯』です」

巻頭に毎号載せた「葦の言葉」です。

「誰も知らないこんなところにも、こんなにも真剣に生き抜こうとする人達がいる。『葦』はそんな人達の作った雑誌だ。

我がもそれが特殊な才能家ではなく、あくまで普通の、ありふれた、わたし達と同じような、

昭和28年頃、会津若松にて

貧しい才能と働かなくては食えない境遇の人達ばかりによって作られた雑誌だ」とも書きました。

当時私は全国各地を歩き回り、働く人々と愛を語り、自由を論じ、農山漁村の集会場でいかに生くべきかを語り明かしたものでした。ここに集めたものはその頃『葦』（昭28）に連載したものです。

雑誌『潮（うしお）』の創刊されたのは『葦』が出て三年ほど後の昭和二十七年、私の最も血気盛んな時代でした。

今これを読み返してみると、気恥しいものですが、そういう中にも昭和二十八年前後という年の、容易ならぬ年だったことだけは肌に感じます。

敗戦後七、八年。一応飢餓の線は脱したとはいうものの、思想的、政治的にはかえって深刻さを加えた感があり、また経済的には弱体な日本企業は「貿易自由化」の荒波に足をさらわれ、一部アメリカ系の下請的なもの以外は、ほとんど気息奄々。農村はアメリカ農産物の氾濫に手を焼いていました。ちょうど今のアメリカ自動車産業と似ています。

「自由貿易」、それはまさに、ペリー以来彼らのかかげた錦の御旗であり、アジアにとってはお

そろしい「凶器」でした。もちろん日本企業は相手方に自粛を要求できるような結構なご身分ではありませんでした。失業者は巷にあふれ、農村では行きどころのない次三男坊と、外地からの引揚者をかかえてじっと耐えていました。

従って村にはバスが走っているのに乗らずに歩いている人もいました。

「バスに乗って早く着いたところで、夜なべ稼ぎがあるわけじゃなし何も稼ぎだ、ナーに夜道に日は暮れぬー」と、十キロや十五キロくらいは平気で歩いていたものです。（本文「強姦・噂・いい話」より）

今の人たちには想像もできないことですが、近々二、三十年前のいつわらざる日本です。無我夢中で過ぎて来たこの戦後ですが、いまこれらの作品を通して見ると、ここにはまだ高度経済成長のかげは、どこにも見られないことに気付きます。

なおこの本は、年代的には前作『塩の道・米の道』（角川文庫）より十年ほど前のもので、私が『あゝ野麦峠』（昭43）に到るプロセスというか、初期のルポルタージュであり、私が「ルポのこころ」とテクニックを模索していた時代の、懐しい記念品であることを付記して、角川文庫出版の序にかえます。

昭和五十六年六月四日

東京小平の自宅にて

著者

目次

野麦峠を書く前の私――序にかえて――　三

I

国境線を行く　九

樺太の見える丘　二五

海に立つ墓標　四五

II

新宿の人々　六九

銀座裏を行く　九九

後楽園パタヤ街　一二三

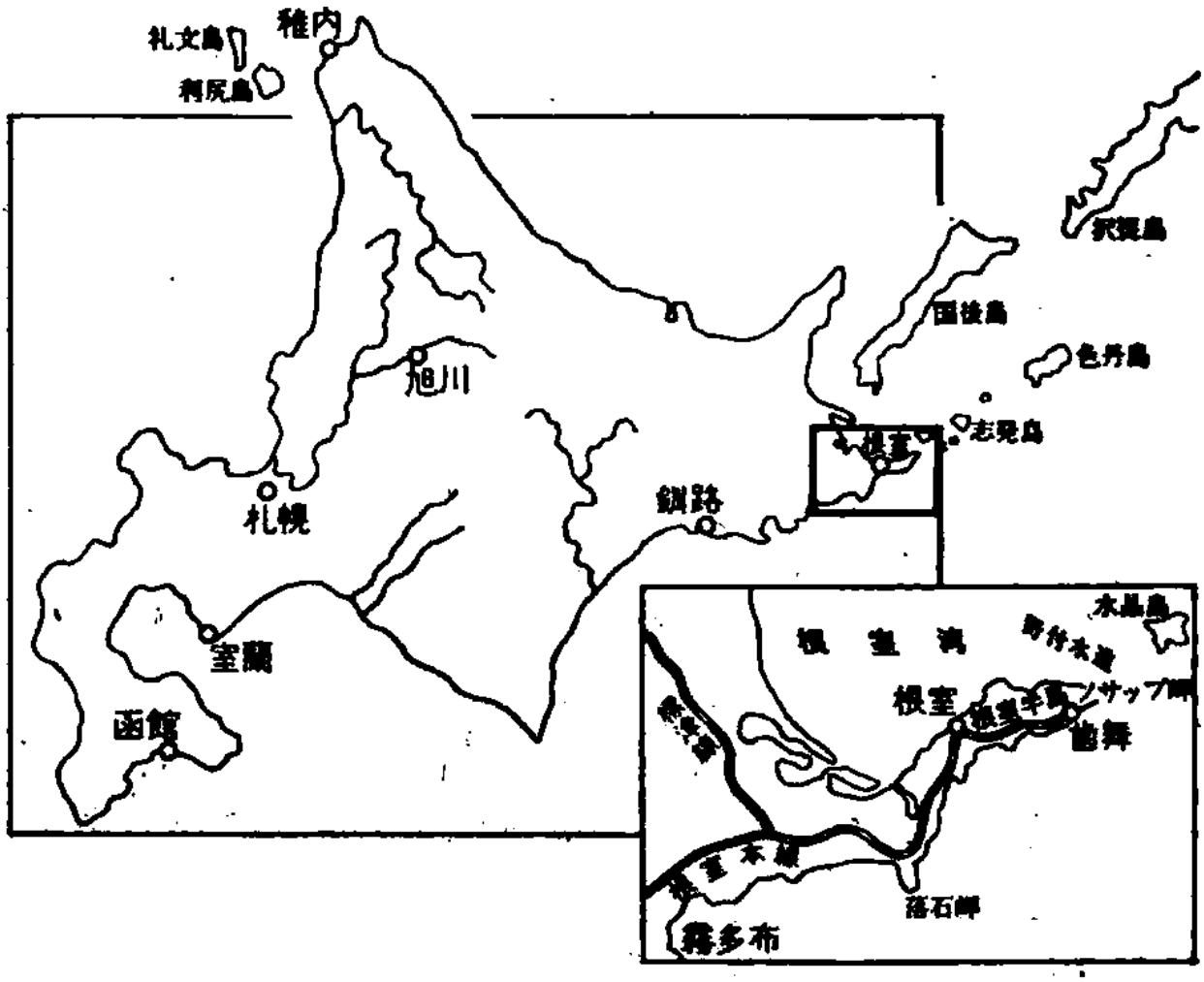
二十世紀の神話　一四五

Ⅲ
〈女工哀史〉の街を行く　一三五
強姦・噂・いい話　一七三
おんばしら　一九一
Ⅳ
倉敷の乙女たち　二〇九
神谷森の人々　二三五
ＰＤ工場　二五七
三十三円で映画をつくる人々　二七五
庶民の常識　二九九
解説　中村安孝　三〇六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国境線を行く（昭和二十七年）

北海道取材中の著者


礼文島
稚内
利尻島
択捉島
国後島
色丹島
旭川
志発島
根室
釧路
札幌
室蘭
函館
水晶島
根室湾
根室
ノサップ岬
歯舞
落石岬
露多布

一

根室から歯舞に行く軽便鉄道の中は、千島帰りの荒くれ男や、手拭で頬かぶりなどをした歯舞の女たちで賑わっていた。

トロッコのような二両の無蓋貨車は荷物と一緒にこれら十数人の人びとを乗せて、ゴトゴト、ゴロゴロとまるでおとぎの国の車のような、むずがゆいほほえましい音をたてて走りだした。

一点雲もない晩秋の午後である。

どこまで行ってもなだらかに起伏する根室半島の大草原、点々と放牧されている家畜の群れ、名も知らない白い花や、赤いハマナスの実が軌道の両側に美しい。

時々、米軍の哨戒機らしい大型機が地平線に豆つぶのように現われたかと思うとたちまち超低空で私たちの頭上を通りぬけ、牛馬を驚かして海上へ去って行く。

おとぎの車はたちまち現実にひきもどされる。

トロッコの上の人びとは、みんなそれぞれ醤油樽や、菓子罐や、いも俵などの荷物の上に腰を下ろして、女たちも荒っぽい言葉で勝手なことを話し合い、それを私は、そばでじっと黙ってさっきからきいている。

中年婆さんが浮気亭主の操縦法を子持ち女に教えているのである。

「男なんてものはよ、どいつもこいつも獣みたいなものだが、御しようによっては結構可愛い

い坊やにもなるものだ。ふしぎなものさ。そりゃ可愛いいもんだよ――ちょっとした手心よ……」

「その手心がききたいんだよ」

と頬かぶりをした子持ち女がすかさず聞きかえすと、

「それはよう」と中年婆は耳もとで何かささやいた。

「まあ！　おらあやだ!!」

子持ち女はおおげさに驚いてみせた。その時、醤油樽に腰を下ろしていた漁師らしい五十がらみのヒゲダルマが、

「婆あ、つまらんこと教えんでもええ!!」と突然どなった。

そしたらまた、その中年婆がやり返した。

「何いってるだ、この助平爺メ!!」みんなが一度にどっと笑ってその笑いがしばらくつづいた。

こんな北の果てにきて、こんなおとぎの車の上で、私はこんな人間臭い話を聞こうとは思わなかった。やっぱり、ここも人間の住んでいる所に間違いない。

そんなことを考えている時、おとぎの車が急に止まってしまった。どうしたのかと思ったら大きな牛の群れが軌道の上にゆうゆうと寝ているのには恐れ入った。

運転手が下りて行って石を投げて追ってみたがのんびりした彼らを相手ではどうにもならない。家畜が入らないように張りめぐらした柵がこうなってはかえって障害である。

お客も下りてみんなで石を投げる。北海道の旅にはこんなのがなくてはおもしろくない。

私はすっかりうれしくなって子供のようにどんどん投げた。牛が、算をみだして逃げる。おと

ぎの車は、またゴトゴトと動き始めた。

二

右手には、いつしか友知島が大きく見えてきていた。風はなく名物のガスもなく、この土地には今が一番暮らしよい時期かもしれない。さっき助平爺と呼ばれたおやじが、私の隣の醤油樽に腰をかけていたが、何か話しかけてみたくなった。

「おじさん、写真を一枚、撮らしてくれませんか」

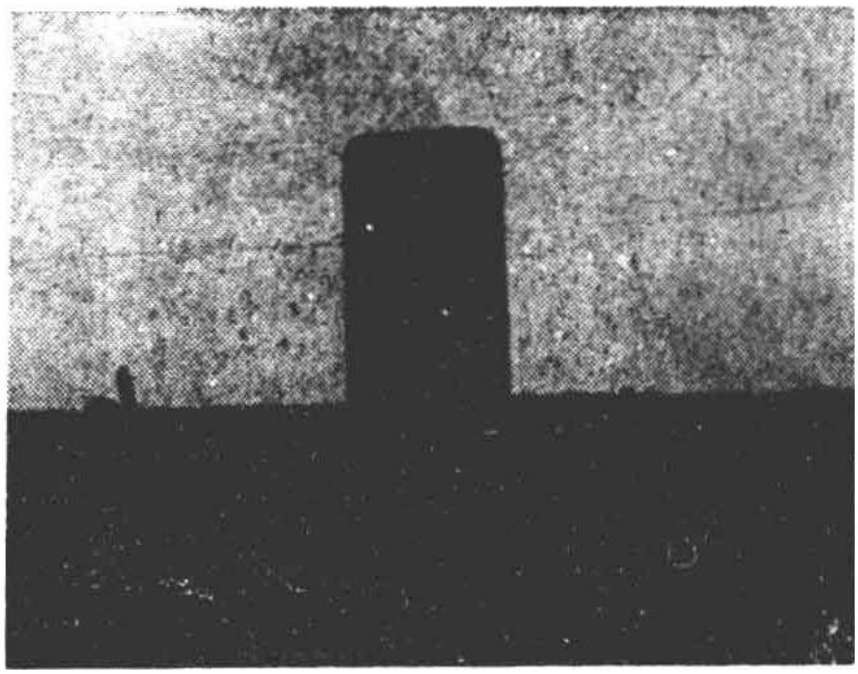
車が美しい海岸線に出た時、私がそういったら変なしょぼしょぼした眼が下からギョロッとしばらく私をにらみつけて、

「おぬしは新聞記者か？」という。

「いいえ、ちょっと違います、雑誌の方です」おどおど答えたが、私はこのおやじの一言が今でも思い出すと妙にゾッとするほど印象に残っている。

「新聞記者って奴は!!」はき捨てるようにおやじはいった。

「どうしてですか？」ときいたがそれきり彼は不きげんに口をつぐんでしまった。



広野に立っている戦死71人の墓

あのふてぶてしいつらだましいが、私は今でも眼にうつる。きっとこの人には過去に何か深い傷あとがあるに違いないと思って、それ以上私も聞き質すことを遠慮してしまった。

それでも歯舞で下車する時「おれを撮りたいのか？　撮ってもいいよ」一言やさしくいってくれた。

僕がさっそく一枚撮って送り先を聞くと、

「いらん!!」

とぶっきら棒にいって破れ手拭の頬かぶりですたすたと海岸の方へ歩いて行ってしまったが、何かひきつけられるふしぎな人物だった。

おとぎの車は海岸線に近い丘陵を越え、沼沢地を回って、友知・沖根婦・婦羅理と変な名前の部落をいくつか通りすぎ、たった二十キロの道を二時間もかかって歯舞についた。

これらの部落名は全部先住民族アイヌの地名に漢字をあてはめたもので、ともしりとはアイヌ語で〈間にある島〉の意であり、おきねっぷは、〈赤い川〉の意味であり、ふらりは〈臭気のある入り江〉、はぼまいは、〈水の内にある所〉という意味だという。

こうした言葉を味わっていると、ここに住んでいた人びとの気持ちがわかるような気がする。

明治ころまでこのあたりは網を使わなくてもたくさんの魚がとれた所だ。ふらり部落の入り口には、おそらくたくさんの死んだ魚が打ち寄せられて臭気を放っていたに相違ない。

荒い潮流にさらされた海岸線には点々と少しばかりの貧しい漁民の家があって、トロッコの終点歯舞にはポリス・ボックスも郵便局も雑貨店も旅館も一軒あった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com